

地域経済ウォッチング

いわき民報 2012年1月12日(木曜日)

被災地としてのいわきの日常風景に思う

—差別を生む科学の未熟さ、無力さ—

理不尽を看過しない科学の責任

東日本国際大学経済情報学部長・教授

地域経済・福祉研究所長

福迫 昌之

年が明け、いわき市にはいつもと変わらぬ、いやいつもに増して賑やかな正月の風景がある。気が付けば、いわき市内の道路渋滞とスーパーマーケットの大混雑は、もうすっかり日常の風景になってしまっている。

実際既に2万人超の双葉地域住民がいわき市に移り住み、さらにその数は増加が見込まれ、(主に放射能不安で)いわき市を離れた元市民の数を上回る。とくに住宅供給がひっ迫し、土地購入もままならない現状は、まさに「不動産バブル」を彷彿とさせる。

果たしていわき市は被災地なのか？震災前より賑わうまちの姿を見ると、実は被災地ではないのではないか、という錯覚さえ覚えてしまう。しかし、現実には震災以前のいわき市と同じではあり得ない。とくにいわき市は比較的低線量とはいえ、放射能問題が暗い影を落としていることは言うまでもない。

放射能が恐ろしい原因の一つは、目に見えないことであり、とくに低線量被曝について実証されていない、つまりわからない、ということであろう。いわば未知への恐怖である。そして

放射能という「怪物」を目前にし、科学の未熟さと無力さを思い知らされたことも事実である。



松本清張の代表作の一つに『砂の器』という小説がある。彼の作品はいくつも映像化されているが、その中でも数多くの映像作品が残されているものの一つだ。この巨匠および作品について、様々な論評や解釈がなされているが、多くの作品に共通するテーマは人間の「不条理」、そしてその愚かさ、悲しさであろう。『砂の器』はそれが最も直接的に描かれた作品かもしれない。

昨年、その『砂の器』がまたテレビドラマ化されるとのことで、情報番組でその「番宣」を見ていた。3月11日の朝だったと記憶している—それが何故か心に引っかかっていた(ドラマは秋に放送延期された)。

この小説の重要なモチーフとなっているのが、「ハンセン病」と「差別」である。医学的な研究が発達し、ようやく法律や政策が転換された現在もなお、問題は解決されたとは言えないし、社会的差別は、無論これに限った話ではない。皮肉にもそれゆえに『砂の器』と、人間の「業」とも言うべきその主題が普遍性を持ちうるのである。ただし敢えて言えば、現代において、とくに東北地方に住む者として、どこか遠くの出来事のように感じていた。

しかし、図らずも今回福島県民はその「不条理」を我が身のこととして、味わうことになった。原発事故後に福島県民が受けた「差別」は、「差別」が本質的にそうであるように、まさに「理不尽」なものであった。無論ほかの差別とこれを全て同列に語ることは出来ないし、多くの福島県民、いわき市民は、少なくとも表面的にはその差別を深刻には感じないかもしれない。しかし、例えば福島県の青少年が、とりわけ女子生徒、女子学生が、自身の出自を気にしなければならない、あるいは隠したい、という声なき声を聞くと、その根深い理不尽さにやり場のない憤りを感じざるにはいられない。

理不尽な差別は、理不尽であればあるほど容易に払拭できない。そして、その理不尽を生む要素として科学の未熟さ、無力さがある。

例えば「風評被害」という言葉に過敏に反応する人たちがいる。すなわち「風評被害」という言葉が、あたかもそれに踊らされて行動している自分が攻撃されているという被害妄想と不安によって、ことさらに攻撃的防御行動に駆り立てるのであろう。しかし、一部のヒステリックな拒絶反応を、非科学的と無視するわけにはいかない。むしろそれはこれまで多くの理不尽な差別を生んだ社会の大勢の意見であり、現代においても潜在的な差別の氷山の一角にすぎないかもしれないのである。

無論差別は福島県外からのものだけではない。差別が深刻な問題となるのは、一つにはすべからく内なる差別を構造的に内在するからであり、もう一つは差別が深く潜行し見えにくくなるからである。



いわきの地域経済に目を移すと、一見すると普通の（あるいはより活気のある）日常がそこにはある。しかしあたかも放射能のように、静かに、確実に地域社会を蝕む事態が進行している。ただ地域社会及び地域経済の被害は、具体的な数字や可視的な事態が厳然としてある。そして「差別」は「静かな拒否」となっていわきの地域経済全般、とりわけ農水産業や製造業に深く、重いダメージを与えている。

こうした事態にいかに対処すべきか。それに不可欠なものの一つは、やはり科学（自然科学のみならず社会科学）である。何が、どこまでできるか。ただ、例えば幼児を抱えた母親の福島県に留まる決断が対岸から非難されるような、社会の「理不尽」や「不条理」は看過できない、という思いが、復興のみならず科学の源泉であることは確かである。